# ARCHITECTURAL WORKSHOP in HONGKONG & MACAU 2011
# Transform From Vernacular
# 香港・マカオ建築ワークショップ 2011・ ヴァナキュラーの変換


・はじめに・旅行日程　Introduction/ Itinerary　2
・ワークショップの趣旨とアウトライン　Principle and Outline　Takeo Muraji　連健夫　4

■ワークス
「食のコミュニケーション」　宮地洋（芝浦工業大学大学院）　10
Eating Communication　Yoh Miyachi
「ヴァナキュラースコープ」　荒谷健道（早稲田大学芸術学校）　14
Vernacular Scope　Takemichi Araya
「吊るすという無限の可能性」　今野広大（福井大学大学院）　18
The Infinite Potential of Hanging　Kodai Konno
「朽ちていくホテル」　大出真裕（東海大学）　22
Rotting Hotel in Central Admiralty　Masahiro Ohide
「ヴァナキュラー的非実在からのカジノ」　小林良平（東北大学）　26
CASINO from Vernacular Unreal　Ryohei Kobayashi
「ギャップの中に新たなギャップを創る」　太田潮（東北大学）　30
Make a New Gap in a Gap　Ushio Ota
「風景の奥行き」　雨宮雅明（東北大学）　34
The Depth of Scenery　Masaaki Amemiya
「ギャップ埋め遊び」　島瑞穂（大阪市立大学）　38
Filling Gaps Play　Mizuho Shima
「ゴミの変換からのコネクション」　亀井一帆（日本大学）　42
Connection from Transform of GABAGE　Kazuho Kamei
「おいしいお茶飲みたい」　種村和之（京都工芸繊維大学）　46
I want to drink delicious Tea　Kazuyuki Tanemura
「座ることからの考察」　山本純平（京都工芸繊維大学）　50
Consideration from Sitting　Jympei Yamamoto
「ごみで彩られるまち」　神戸美由起（福井大学）　54
The street are Decorated with Rubbish　Miyuki Kanbe
「旗がつなぐヴァナキュラーな路地のコミュニティースペース」　加藤ひかる（日本女子大学）　58
Community Space for Alley formed with FLAGS　Hikaru Kato
「偏見の認識と、そこから考えるコミュニティーの形成」　中里友美（日本女子大学）　62
Awareness of" Prejudice" ,and Creating Commuinities　Yumi Nakazato
「地の力からのアーケードデザイン」　服部真友子（日本女子大学）　66
Arcade Design from Power of Land　Mayuko Hattori
「洗濯物の変化からのファサードデザイン」　田中裕大（武蔵野美術大学）　70
Fcade Design from Changes of Laundry　Yuta Tanaka
「湿潤な憩いの場 - 噴水公園のカフェテリア -」　山下真一郎（武蔵野美術大学）　74
Humid -GardenFountainCafeteria-　Shinichiro Yamashita
「ポジティブグラフティー」　田中良典（武蔵野大学）　78
Positive Graffiti　Ryosuke Tanaka
「竹を積み上げることによるビルドタイプの形成」　東慎也（武蔵野大学）　82
Build Type formed by Pile up BAMBOO　Shinya Azuma
「自然と人が集まるこもれび空間」　木村あかり（職業能力開発総合大学）　86
Komorebi Space for People gathering　Akari Kimura
「ヴァナキュラー的シークエンスのデザイン」　北村優太（東京理科大学）　90
Design of Vernacular Sequence　Yuta Kitamura

■講評
・レヴュー１　Review-1　Takeo Muraji　連健夫　94
・レヴュー２　Review-2　Kiwako Kamo　加茂紀和子　96
■南社村、香港、マカオ訪問／ヴァナキュラーの視点　Toshikazu Ishida　石田壽一　98
「Visiting Nanja village, Hongkong & Macau ／ The point of view of Vernacular」
■オープンマインドであること　–香港マカオ建築都市ワークショップ体験記 -　Kiwako Kamo　加茂紀和子　100
「An open-minded Workshop 」
■同上　日本建築家協会 Bulletin2011 年 8 月 26 日号掲載　Kiwako Kamo　加茂紀和子　102
■香港マカオ建築都市ワークショップ 2011 に参加して（海外でのデザインワークショップの意味）　Kodai Konno　今野広大　104

■プロフィール
・参加者プロフィール　Profile of the Participations　105
・講師プロフィール　Profile of the Tutors　110

# ARCHITECTURAL WORKSHOP in HONGKONG ＆ MACAU 2011

## はじめに

「ヴァナキュラーからの変換」をテーマにして、海外でワークショップを行ったのは、今回で７回目となります。１回目は 1998 年にマレーシア・シンガポール、２回目は 1999 年に韓国、３回目は 2000 年にブラジル、４回目に 2002 年にインド、5 回目は 2005 年にトルコ、そして６回目は 2008 年にフィリピンにて行いました。そもそものきっかけは 1997 年に北京で行われた「コンテンポラリーヴァナキュラー国際建築会議」に参加したことです。今後の建築を考える上で、土着の文化・地域性などヴァナキュラーに関わるものを活かしていくことの重要性をこの会議を経て強く感じました。この中心人物であるシンガポールの建築家、ウィリアム・リムに勧められ、マレーシア・シンガポールにてワークショップを行い、参加者のみならず現地の協力建築家の反応に確かな手応えを感じました。そして、このテーマを深める上で、様々な国でワークショップを実施し、文化の異差を体験することが大切と考えた訳です。

さて、今回、南社村、マカオ、香港をサイトに選んだ理由は、中国において、異なる文化、歴史を比較的近い距離で廻り体感することができるという立地であること、AA アジアのネットワークを通じて、現地講師の協力が得られたことです。

３月１１日の東日本大震災は、建築に対する価値感や考え方を根本から揺るがす未曾有の出来事でした。次の日に予定していた説明会を延期し、実施するか否かの判断はとても難しい状況でした。参加学生からの WS への意欲と実施への要望を聞いて実施することを決定しました。１週間延ばして開催した説明会には、被災した東北大学の学生も参加しました。

今回の随行講師は東北大学教授の石田壽一教授で、東北大学も被災しており参加が危ぶまれましたが、調整して頂き、参加が可能となりました。氏のインターナショナルな視点は学生に多くの刺激を与えてくれました。また建築家の加茂紀和子氏は、サスガ、みかんぐみ！コンセプチュアルなワークを含め、柔軟に対応、ご指導いただき、充実したワークショップとなりました。ここに心から感謝の意を表します。

現地講師は、マカオではルイ・レアロ教授、ヌノ・ソアレル氏、香港では、香港大学のクーン・ウィー氏、ツアン・トーマス氏、AA 出身の建築家トニー・レン氏に協力して頂いた。レクチャーのみならず、学生の発表に適切な講評・アドバイスを頂きました。ここにお礼を申し上げたいと存じます。

今回の参加者は、１２大学から１年生～大学院生、２１名という大所帯のメンバーとなり、その視点も多様で、良い意味で刺激しあうと共に、プロジェクトで苦悩する中で、強い仲間意識が生まれたことは嬉しい発見でした。

この小冊子にて、ヴァナキュラーの変換と共に、ダイナミックなワークショップのプロセスと参加者の作品の魅力を楽しんでいただければ幸いです。（2011 年８月　主催者：連健夫）

This workshop in Nanjya-village, Macau and Hong Kong 2011 follows the previous workshops, Malaysia-Singapore 1998, Korea 1999, Brazil 2000, India 2002, Turkey 2005 and Philippines 2008. The theme of the workshop is “Transform from Vernacular” which was motivated by the experience of the international conference,” Contemporary Vernacular” in Beijing, 1997, organized by William Lim. I think that it is important to explore the design methods looking at architecture in the future through workshops in various countries.

This workshop was held just after the terrible disaster in East Japan. Therefore, the decision was so difficult. Many participants including students from Tohoku University having the damages expressed positive expectation to this workshop. Therefore, my decision was go!!!

I really appreciate the tutors, Professor Toshikazu Ishida and Ms.Kiwako Kamo who really cultivated students’ creativity. I also appreciate all the supporters including Professor Rui Leao, Mr. Nuno Soares in Macau, Mr.Koon Wee, Ms.Eunice Seng, Mr.Thomas Tsang, and Mr.Tony Leung in Hong Kong. They gave interesting lecture and meaningful advice to students.

Please enjoy this booklet with 21 fascinating projects by the 21 students and meaningful process in the workshop.

August.2011 Organizer: Takeo Muraji

## ■ワークショップ日程と地図

２０１１年３月２４日（木）～３月３０日（水）

２４日（木）　羽田→香港､ﾊﾞｽで移動、東莞にてディナー

２５日（金）　東莞→南社村　視察・ヴァナキュラー探し→東莞、街歩き→深圳からフェリー　個人指導→マカオ

２６日（土）　マカオ　ヴァナキュラー探し、テーマ絞込み、実験、個人指導、マカオ大学にて中間発表

２７日（日）　マカオからフェリー　個人指導→香港　コンセプトワーク、講師によるレクチャー・ディナー

２８日（月）　香港　敷地探し・実験、提案ワーク、個人指導

２９日（火）　香港　提案ワーク、香港大学にて発表会、夜景

３０日（水）　香港→羽田

## ITINERARY of WORKSHOP

March 24th ~ 30th 2011

24(Thu)Depart from Haneda to Hong Kong, Dongguan

25(Fri) Dongguan→Nanjya village Observation,Vernacular investigation→Dongguan→Shenzhen  Coach→Macau

26(Sat) Macau Vernacular investigation, Finding own theme, Experimentation,coach,Middle Jury in Macau university

27(Sun) Macau, Coach→Hong Kong Concept work, Lecture & Dinner

28(Mon) Hong Kong Finding site, Experimentation, Proposal work, coach

29(Tue) Hong Kong Proposal work,Final Jury in Hong Kong university, Night view

30(Wed) Depart from Hong Kong to Haneda

**ルートマップ**

## ■ワークショップの趣旨とアウトライン

建築家・連健夫

中国、広東省の南社村、マカオ、香港の３都市をフィールドに、ヴァナキュラー（地域性・土着性）からの変換をテーマにワークショップを行った。２０１１年３月２４日～３０日、７日間の日程、香港経由で中国、広東省東莞市に入り一泊、次の日、明・清代の民家が残っている南社村でヴァナキュラーを調査、そしてマカオに入り２泊、そこでコンセプトを発表する。そして、香港に移動して３泊、コンセプトに合った敷地を見つけて何らかのデザインをするというプログラムである。参加者は雑誌公募と共に当方の講演などを通し、１２大学から集まった大学院生２名、大学生１９名の計２１名である。随行講師は、東北大学の石田壽一教授と「みかんぐみ」の加茂紀和子氏である。石田氏はオランダ、デルフト大学での研究員など、海外経験を持っておられ、是非、参加して欲しいと思いお声を掛けさせていただいた。OKの返事を頂き、準備をしていた矢先、３月１１日の東日本の大震災となった。東北大学の校舎もダメージを受け、大変な状況の中、御調整頂き参加が可能となった。建築家の加茂氏は、建築のみならず先進的アートプロジェクトが豊富な建築家グループ「みかんぐみ」の主宰者の１人である。コンセプトワークを伴なうこのワークショップにピッタリと思い、お声を掛けさせて頂いた。快く承諾頂いた。震災直後、ワークショップを実施するか否かの難しい局面、メールでやりとりをする中で、意識を共有することが出来たのはとても良かった。

■ヴァナキュラーの視点の意味

参加者達は、まず訪問地でヴァナキュラー探しを行う。このワークショップはヴァナキュラーの学術的定義づけをするのが目的ではなく、あくまで設計の提案に繋げるのが目的であるため、自分の体験の中でヴァナキュラーとは何なのかを捉えることが大切である。これは参加者である日本人が、海外の異文化を体験する中で抱いた興味が、プロジェクトの「きっかけ」となる。ある参加者は南社村の池に写った景色からヒントを得て虚像と実像をテーマにプロジェクトを展開した。またある参加者は、食べ物に興味を持ち、食を通したコミュニケーションを探求した。

さて、このようにヴァナキュラーを取り上げて、探求する意味は何なのか。大きく３つある。第１に、文化的要素を設計の条件に取り入れる意味である。機能主義を基本とする合理的アプローチの最大の問題は歴史的視点、地域的視点など文化的側面が弱かったことにある。建物はある意味、法的、構造的、機能的側面を解決すれば実現するわけで、文化的側面を含まなくともスキルとしては成立する。しかし、このスキルに偏った建築の結果、どこの都市でも同じような風景が生まれ、地域の特徴が失われてきたのは事実である。この意味で、地域性・土着性を捉えるボトムアップの設計プロセスが大切になってくる。このことにより、文化の継承や創造という文脈を都市や建築に関係付けることや、更には歴史や保存の視点を取り入れることが可能となる。

今回の大震災の復興においても、この多様性をどのようにまちづくりに活かすことができるかが問われている。近年、市民参加のまちづくりや、歴史や文化の視点が大切だという認識は一般的になりつつあるものの、デザインに変換する手法や評価軸はまだまだ未熟な状態である。この能力獲得も今回のワークショップの大切な目的の１つである。第２は、建築の意味そのものの広がりである。建築を単なるハードな構築物として捉えるのではなく、民族や宗教、流通や政治システムなど文化人類学や社会学、経済学を含むトータルなものとして捉えることである。これはプログラムやストーリーという言葉で説明することもできる。建築を時間軸で捉え、そこに生じる様々な出来事（インシデント）を繋げた物語（ナラティブ）であるというトータルな考

## 【The concept and the out line of this workshop】

Takeo Muraji

We did a workshop in 3 cities in China; Nanjya village, Hong Kong and Macau from 24th to 30th March 2011. The theme was “Transform from Vernacular” . Why we visited the cities in China was that they have different back ground and different vernacular aspects. I thought the various vernacular aspects can stimulate participant’s creativity.

The participants were 21 students from 12 universities. They were from 1st year students to graduate school students.A professor of Tohoku university, Toshikazu Ishida joined this workshop as one of the tutors. Another tutor was an architect, Ms.Kiwako Kamo of Mikan-gumi.Although we had the East Japan big disaster on 11th March, they over came the difficulty and joined this workshop.The itinerary was from Nanjya village (1night), Macau (2 nights), Hong Kong (3nights). The programme was to find out vernacular and creating concept through Nanja village to Macau and then to propose something in Hong Kong.

■The meaning of the point of view of Vernacular.

The participants initially needed to look for Chinese vernacular. The purpose was not to define the vernacular, was to design something new from the vernacular. Therefore, the participants needed to identify the vernacular through their experience. One of the students was interested in reflected images on the pond in Nanjya village. He explored about the relationship between the real image and the unreal image. Other student was interested in communication through food. He experimented various situations using local foods.

What was the meaning of the exploration looking at vernacular? I think that there were mainly 3 points.

1, The meaning of the cultural element becomes one of the conditions for design. One of problems in the functionalism was a lack of cultural points of views including history and locality. Therefore, the most of cities has lost local aspects by the modernization which is

え方である。また建築を芸術として捉えるときに必要なメッセージ性やコンセプトといったソフトな部分を明確に抱合する意味でもある。第３には、プロセスとコンセプトを大切にする教育的意味である。一般の設計課題では、敷地が与えられ、諸条件を満足する解答としての提案が求められる。このためコンセプトが不明瞭になりがちであるが、このプログラムでは､ヴァナキュラーを手がかりに調査、分析し、探求する中でコンセプトを一旦、明確に構築することが求められる。そしてコンセプトに合った敷地を見つけ提案するという探求型プロセスであるため、敷地設定理由とコンセプトとの関係性を捉えることが求められる。これは、課題としては高度かつタフであり、この経験を経て参加者は自らの能力を耕すことになる。特に異文化の中でのヴァナキュラー探しの体験は、現地から講評者を迎えての英語の発表体験と共に、国際的な視点を与えてくれる。

これらのことは、ある意味パラダイムシフトにおいて必要な建築の視点であるが、この東日本大震災における復興のデザインを考える時に、これらが明確化、先鋭化してきている、と言うこともできる。

■訪問地のヴァナキュラーの面白さ

「1 日目：３月２４日」中国に入る

今回訪問した３つのサイトは異なる背景を持ち、特徴あるヴァナキュラー性を持っている。最初の訪問地、南社村は正しく中国であり、香港経由で中国に入った時の変化は大きかった。香港側の審査ゲートと境界線、更に中国側の審査ゲートを越える。ここを、中国から通っている幼稚園児を目の当たりにして、中国に香港が返還されたものの外の国という境は歴然として存在している。香港で迎えた旅行代理店のガイドと中国でのガイドを通しての話からも、その違いは明白であった。自由に海外に出ることはできず、香港に行くにも条件がある。中国に入り広東省の大都会、東莞市を通り、ホテルに一泊する。夕食の後、講師の部屋に参加者全員が集り、中国の印象やワークショップへの想いなどを各自発表した。

「２日目：３月２５日」南社村､ヴァナキュラー調査

次の日の朝、南社村に向かった。ここには昔の民家が残っている、しかも使いながら保存している村である。ガイドの話では安全とのこと、時間を決めて自由行動にした。池を囲んで民家が建ち並び、すてきな風景である。質の高い中庭式の民家が多くあった。保存の程度は良い。参加者達は歩き廻り、自分の興味を見つけ出す。ある者はスケッチを行う、ある者は写真を撮る、ある者はゴミや落ちているものを拾う、など思い思いにヴァナキュラー調査を行なった。次に東莞可園を訪問した。1850 年に築造され、清代の広東四大名園の１つである。池を渡る橋､屋根のそり､丸い穴から見える風景､迷路的で飽きない回遊､所々にある奇岩､さすが中国の名園である。これも中国の特徴的ヴァナキュラーである。次にアヘン戦争博物館を訪問した。アヘン戦争は中国を理解するためには重要な歴史的出来事である。そこには多くの写真や模型などにより、視覚的、体験的に理解できるよう展示されていた。

based on functional approach. Therefore, it is important to deal with vernacular for design process so that the cities have own identity including cultural aspects.

2, The expansion of architectural meaning.

After the modernism, as the space oriented, the meaning of architecture is rather important. The expansion of architectural meaning is that architecture should have various meanings not only building, but also, ethnic, religion system of politics, sociology and economics, as a total subject. It can be explained, as “Narrative architecture” which has a story having elements of time and incidents.

3, Meaning of architectural education, regarding concept and process.

In ordinarily process, concept often is not clear because the purpose is to design a building in a site with the technical skill. In this programme, the participants needed to create concept clearly, then design something, looking at the suitable site for the concept. Therefore, this programme was rather difficult and tough, looking at the depth of the exploration.

■Interesting the different Vernaculars

(First day: 24th March) Enter to China

The three sites have different back grounds. Therefore, the vernaculars are so different. Nanjya village has typical Chinese traditional houses. Although, the village is conservation area, people live there. Therefore, there are still traditional atmosphere and traditional life of China.Macau was colonized by Portugal. Therefore, there is strong Portugal influence in it. The city is a famous about Casino amusement and international city.There is fascinating contrast between the traditional atmosphere of Portugal and the powerful modern casino atmosphere. Hong Kong was colonized by Britain. It has strong British cultural influence. The high density atmosphere is typical identity of Hong Kong.

We started this workshop from the typical Chinese vernacular. At14:00 on 24th we arrived Hong Kong air port, and then moved to China through the boundary with the checking counters. Then we went to Dongguan city. We felt strong contrast between Hong Kong and Donggauan. The guide said that people can not freely visit Hong Kong from China. There are various conditions for it. We stayed a hotel in

中華民族が外国の侵略に断固として抵抗した精神や状況が感じられた。

その後、フェリーで移動、マカオ・タイパ島に向かう。フェリーの中で、個人指導を実施する。３人の講師に対して２１人の参加者、７人づつ担当して行う。興味を持ったヴァナキュラーとは何か､何をテーマにしてプロジェクトを扱いたいのか、などの相談とアドバイスである。各自１０分の持ち時間であるが、自分のことばかりしゃべり過ぎて、講師のアドバイスの時間を少なくしてしまう参加者もいる。そのことを指摘すると次回からは、要領よく説明するようになる。これも教育効果と言えよう。個人差は歴然とある。ただ歩き廻っただけで、何も捉えていないプロジェクトから、興味が明確で様々な調査を実施しているプロジェクトまで様々。教師はこの時点で、面白い視点や可能性のある視点を指摘し、それを発展する方法などアドバイスを行う。

マカオ・タイパ島に着いたのは１８：３０、周りはすでに暗くなっている。船からきらめくネオンが見える。近代都市であり､カジノの街、マカオをいやおうなしに感じる圧倒的光景だ。夕食の前にレストランにて、現地の２人の建築家にレクチャーをいただいた。最初はヌノ・ソアレス氏、自分の設計作品、改修プロジェクトを中心に説明を頂いた。もう１人は、ルイ･レアロ氏、マカオ建築家協会の副会長、セント・ジョセフ大学教授である。氏はマカオ港湾建物の保存プロジェクトを説明頂いた。保存とは言っても創造的な改修デザインがなされている。保存の意識については街並を保存することを基本とする中で、ガチガチの凍結保存ではなく、かなり余裕ある保存であることが理解できた。その後の夕食で、マカオで活動している建築家は、ポルトガルなど様々な国から来ており、その国際的な位置づけが感じられた。

「３日目：３月２６日」マカオ、コンセプト探求・中間発表

午前中、歴史市街地区を廻る。ここは 2005 年に地区そのものが世界文化遺産となっている。２２の歴史的建築物と８ケ所の広場を含む日常生活地域である。まず聖ポール天主堂跡を訪問する。元々は１６世紀に建てられた礼拝堂であったが、1835 年の火事でファサードと階段だけが残ったものである。典型的なバロック様式、壁だけなので窓に空が見えるのが興味深い。ガイドの説明の後、地下に造られた博物館を廻り、隣のモンテの砦に行く。１７世紀にイエズス会の修道士によって築かれた要塞で大砲台がある。これらを見学する間、参加者達はそれぞれ自分のテーマに沿ってワークをする。旗をテーマにしている学生は、スカーフで旗を作り、それを振りながら歩く。木漏れ日を

the city. After the dinner, we had a meeting and each participant explained the first impression of China.

(Second day: 25th March) Nanjya village, Vernacular investigation

We visited Nanjya village in the morning. It was so beautiful place. There is a pond. Traditional houses surround it. The quality of conservation is quite good. Interesting thing is that people live there.Therefore, Chinese vernacular including not only houses but also the life are still there. The guide said that this place is safe. So, I gave 1 hour for students to freely investigate the vernacular. They did various investigations, such as taking photos, sketches, collecting materials, and so on. Then we visited Keyuan garden. It was built in 1850, one of the four beautiful gardens in Dongguan. It has Chinese vernacular aspects of the arrangements of pond, alleys, walls, bridges, and stones. Then we visited Opium War Museum. It is important to understand Chinese history.After that, we moved to Macau by a ferry.When we reached Macau, it already became dark. We saw the beautiful and flashy lighting of casino buildings that was strong aspect of Macau. Before the dinner, two architects in Macau had lecture for us. Mr. .Nuno Soares who is a member of board of directors of the Architects Association of Macau, presented his refurbishment projects. Then Professor Rui Leao of Sao Jose University showed his conservation projects including Maritime Administration Building. It was built in 1874. After the administration moved from it. He did refurbish design for it in 2004. I felt the design was so creative, though it was conservation project.

(Third day: 26th March) Macau, Exploring Concept, Middle Presentation

In the Morning, we visited Historical area of Macau that became World heritage in 2005. There are 22 historical buildings and 8 squares. We visited Ruins of St.Pauls, St.Dominico’s Church, Mount Fortress and Senado Square. Students were doing their works during the visits. A student, who deals with “Flag” , made a flag by herself and waved the flag. Other student was checking the sceneries through holes in a paper. She was exploring

テーマにしている学生は、折り紙に細かい穴を空け、それを通して景色を眺めていた。街の中心、セナド広場に行く。広場はきれいに小石が敷き詰められ、周りはクラシックなポルトガル様式の建物が囲み、とてもすてきな場所である。時間を決めて自由行動とした。その後、バスで一旦、ホテルに戻り、午後はすべて各自のワークの時間とした。夕方の中間発表のために模型や図面作りなどの作業をする者、スタディーが足りなく街に再び出る者、写真データーをアウトプットするためにプリントショップに行く者など、様々である。
バスでセント・ジョセフ大学に向かう。大学は市街地にありコンパクトな建物、案内された建築学科の教室は広く、プレゼにはピッタリである。中間発表では、中国に入ってからのヴァナキュラー調査と分析、そこから設定したコンセプトを発表する。コンセプトは図面や写真なので表現されたものやコラージュ、オブジェなど様々である。講評者は昨日、講演を頂いたヌノ・ソアレス氏とルイ・レアロ氏である。いずれも参加者の調査・分析内容の目の付け所の良さについてポジティブな反応を頂き、次のステップについて的確なアドバイスをして頂いた。終ってからの食事会では、彼らが自身が気がつかないマカオらしさを学生が興味を持っていることが、面白かったとの感想を頂いた。

「４日目：３月２７日」香港、視察、交換レクチャー
　午前中は自由行動、各自、昨日のアドバイスを受けてワークを行う。その後、フェリーに乗って香港へ移動。船内で昼食の予定だったが、食堂等は無く、着いてからすることになった。船内では個人指導を行う。ただ､船が揺れるので､ホドホドにしておかないと気持ち悪くなる。香港に到着､バスに乗り､まずは九龍島を視察､ネーザンロードを通り､女人街など主だった所にバスを停めて、時間を決めて、自由調査とする。その後、ホテルでチェックイン、レストランで講演会と夕食。講演は地元建築家３名、我々３名の講師が、交互に行う形で行った。最初に石田先生のレクチャー、自身の水に関わる様々なプロジェクトを流暢な英語で分かり易く話をされた。次はトニー・レン氏、彼はAAスクール出身、香港で若手建築家として活躍している。カラフルで斬新なアイデア満載のコミュニティー施設の改修プロジェクトを紹介した。次に加茂先生から、教育施設のプロジェクトとアートプロジェクトをプロセスも含めて話をされた。流暢ではないが、堂々とはっきりと説明する態度は、学生たちに良い影響を与えると思われた。次に香港大学助教授のツアン・トーマス氏、クーパーユニオンの出身だ。香港の刑務所で実施したアートプロジェクトを発表した。次に私から、ワークショップの趣旨とプロセス､ヴァナキュラーの変換に関わるプロジェクトを発表した。最後は､クーン･ウィー氏､香港大学の建築ディレクターを務めており、ワークショップのテーマに関わる様々な学生のプロジェクトを紹介してくれた。このような交換プレゼは、お互いのことが理解でき、コミュニケーションを取るのに大いに役に立つ。学生もずいぶん刺激になったようである。

「５日目：３月２８日」香港、敷地探しと提案
午前中は香港島視察、バスで行く。まずはセントラルエリア、高層ビルが集っている地域である。ここにはIM・ペイ設計の中国銀行やノーマン･フォスター設計の上海銀行などがある。時間を決めて自由行動とした。これらの近代建物が風水に基づいて設計されているのは興味深い。その後、訪問したのはレパルスベイ、往年の名画「慕情」の舞台にもなったリゾートエリア、高級住宅地でもある。ここには、観光案内の写真に良く登場する中央に穴の空いた集合住宅がある。これも風水を考慮した結果のデザインである。砂浜を歩き、ティンハウパークを訪問、ここには道教寺院があり中国らしき雰囲気が味わえる。この間も、参加者達は自分のプロジェクトを進めている。コンセプト模型を持って、様々な所に置き写真を撮ったり、スケッチをしたりしていた。香港では、コンセプトに合った敷地を探し、何かをデザインするというプログラムであり、自分のコンセプト模型を使っての敷地さ探しという訳である。同時に、何をデザインするかを考えながらであり、観光スポットを廻ってはいるが、プロジェクトのことで頭一杯という状況である。ふたたび、セントラルエリアに戻り、ここで解散。

sunshine through trees using the paper with holes, as the device.On the evening, we had a middle presentation, where students present the vernacular investigations and the concept works. Pro.Leao and Mr.Soares came to the presentation as the critics. Students need to explain their works in English. Although their English conversation was not good enough, they can use drawings and concept models. Pro.Leao and Mr. Soares gave appropriate advice to students looking at their possibility. Their responses were very positive to each project. The interesting thing was that students found out aspects of Chinese and Macau vernacular that the Macau architects has not noticed.

(Fourth day: 27th March) Hong Kong Visiting and Exchange Lecture
We moved to Hong Kong by a ferry. Then visited some places including Ladies' Market in Kouloon area. After check-in the hotel, we had an exchange lecture between Hong Kong and Japanese architects. Prof. Ishida initially presented his projects including works when he was in Dutch that relates to water environment in fluent English. Then Mr. Thomas Tsang who is teaching at Hong Kong University presented his art works. It was so powerful and interesting works. In the next, Ms. Kamo presented her school project including the workshop process. Although her English was not fluent, she clearly explained them. I thought that her sincere attitude stimulated the students. Then Tony Leung presented his refurbishment works including furniture. They were so exciting and unique projects. I presented the concept of this workshop and some my projects including user participation process using collage. Finally Mr. Koon Wee who is teaching Hong Kong Univ. presented his students' works looking at the theme of this workshop, "Transform from Vernacular" . I thought that the works stimulated Japanese students. I really appreciate the presentation.

(Fifth day: 28th March) Hong Kong, look for suitable site and design something.
We initially visited Central area in Hong Kong Island that is high-rise buildings area including Hong-Kong Shanghai Bank designed by

各自、自由行動とする。このエリアは、2階建てバスが走るなど、イギリスの雰囲気一杯である。ショッピングセンターの香りもイギリスを思い起こさせる。5年間住んだイギリスが懐かしく感じた。講師3名は、ソーホー地区のミッドレベルエスカレーターなどを廻り食事を取った。このエスカレーターは映画「恋する惑星」にも登場した名物である。その後、我々は船で九龍島に渡り、歩いてホテルに帰った。夜は、最後の個人指導である。コンセプトに合った適切な敷地を見つけているか、提案に力があるかということがポイントになる。学生によって進捗具合は様々である。不十分なものは、次の日の早朝、再度、敷地に行くことをアドバイスしたケースもあった。

「６日目：３月２９日」香港、最終発表会
午前中は各自、午後の発表のためにワークをする。多くは各自のホテルの部屋で行う。講師は各部屋を廻りアドバイスをする。英語での発表なので、英語の指導も併せて行った。
発表の場所は香港大学、ある大学ランキングにおいて、アジアで東京大学を学力で抜いている。ゲートまで、エウニス･セングさんが迎えに来てくれた。彼女はAAアジアの仲間で香港大学では講師をしている。発表会には香港大学の学生も見に来ていた。講評者は､交換レクチャーの３名に加え、何人かの先生が授業の合間に参加してくれた。また香港大学に留学している学生、藤森君もこれに加わった。学生の発表は、図面と模型があるので、たどたどしい英語でも講師には内容が伝わる。質疑の場面では、石田先生が通訳を務めてくれた。半分の発表が終った頃、クーン･ウィー氏の提案で、中休みをして、その間に香港大学の学生のプロジェクトの発表を行った。村の保存プロジェクトや映像を使っての都市の読み取りの発表など、興味深いものがあった。各プロジェクト、個性的でかつおしなべて質が高かった。
我々の発表は、刺激的であったらしく、講評内容や議論はかなり深いレベルとなった。全体にヴァナキュラー調査・分析において、目の付け所の良さやコンセプト模型のユニークさを賞賛するなどポジティブな反応だった。しかしながら、敷地設定と提案については、もう少し突っ込んだものが期待されたようだ。これについては、１週間のプログラムにおいて提案にかける時間は１～２日と少なく、一般の課題に比較すると密度が薄くなるのはいたしかたない。プログラムにおいて大切にしているポイントは何と言っても、フィールドワークからコン

Norman Foster and China Bank designed by I.M.Pei. Interesting thing was that the buildings were designed looking at Fu-sui which is traditional Chinese philosophy including good and bad directions. We had free time for the investigation there.Then, we visited Repulse bay which is resort and residential area of high society. We visited Chinese temple there. During the visits, students were exploring their projects and looking for suitable site for each project. A student took photos of the scenery with his concept model to check whether suitable site for the project.We came back to Central area again. Then we had free time for projects. The three tutors including me visited Mid-level-escalator in Soho area that is one of famous areas in Hong Kong.After we had lunch, we came back to our hotel. On the night, we had tutorial that was the last opportunity for students to get advice from the three tutors toward the final presentation. Some students were not good enough quality. So they wake up early morning and visited their sites again to explore more.

(Sixth day: 29th March) Hong Kong, Final presentation.
In the morning, I looked around each student’s room and gave advice, how to explain their works in English. They needed to present in English to teachers in Hong Kong University afternoon. Eunice Seng waited us at the gate of Hong Kong Uni. I met her when AA Asia workshop in Shanghai 2009. She is PhD candidate and teaching at the university. Already many students of Hong Kong Uni came to the presentation room. The critics were Eunise Senrg, Koon Wee, Thomas Tsang and Tony Leung. Each student presented the project using drawings and concept models and performance. Although their English were not good enough, the drawing and the model were very helpful for the critics to understand the works. Interesting thing was that the critics often debated each other in some controversial projects. Although the qualities of the projects were various, the most of the response were quite positive about the investigation stage. For example, “You found out vernacular aspects well that we Chinese has not noticed yet”, “The way of the investigation is unique using

セプトを創造する部分であるから、その意味では、うまくいったという感じがする。各プロジェクト、講評者間で熱いディスカッションとなり、全体として１時間を超過し、終わったのは８時であった。
その後、皆で食事会をした。講評者からも挨拶をいただき、このワークショップの面白さや学生の作品についての独創性など、ポジティブな内容であった。学生たちも食事の中、現地講師に質問するなど交流ができたことは何よりであった。食事の後、皆でビクトリア・ピークに行った。香港全体を一望する屈指の絶景スポットである。学生たちは発表が終った後の開放感で、ご機嫌で賑やかだった。10 万ドルの夜景を楽しみつつ、ワークショップがうまくいった満足感で、私自身とてもハッピーであった。

■ヴァナキュラー性と変換
今回訪問した３都市はまったく異なる背景を持っており、そのヴァナキュー性については、正しく３者３様と言える。南社村は中国の伝統的な民家が持つ建築的特徴があり、ゆるやかな時間や生活慣習がある。マカオはポルトガルの植民地であったが故の歴史地区の美しい街並ときらびやかなカジノのネオンがコントラストを成す。香港はイギリスの植民地を経験し、香港島では２階建てバスや近代的ビル郡など、様々なところにイギリスがあるという感じである。また九龍地区の喧騒な密度感も香港のヴァナキュラー性と言えよう。参加者達は、この３つの特徴あるヴァナキュラーを体験し、そこから自分の興味を深め、各自コンセプトを見出した。ここには、頭で考えるのみならず、身体的な働きが創造性を刺激し、新たなものを生み出しているのは間違いない。元々あったものがヴァナキュラー性であるならば、それを抽出するだけでは、ノスタルジーをベースにした単なる継承となってしまう。このワークショップでは、これをコンセプトにして何かを生み出す、すなわち TRANSFORM（変換）に意味がある。各自のプロジェクトの内容は異なるが、全員、提案までゴールまでの経験することが出来たのは良かった。そのプロセスの体験が参加者の身体に「ものさし」として残り、それは将来において、何らかの創造的影響を与えると信じている。

direct your experience”, “You created powerful concept using performance” and so on.However, in the proposal stage the critics wanted something more looking at the depth. I am not surprised at the response because they spent 4 days for the investigation and the concept making stage, but they used only 2days for the proposal stage. This program of the workshop rather regards the investigation and the concept making. Therefore I allocated longer days for them. The most of students have not many experiences about the investigation and concept making process in their architectural school in Japan. Therefore, I would like them to learn how to deal with the investigation and concept making looking at vernacular issue abroad.After the half number of students’ presentation finished, students of Hong Kong University presented their recent works by the offer of Mr. Koon Wee. The programme of the works was to make a film showing their analysis of Hong Kong. Their works were so powerful and creative using various techniques including sound. Their analyses were unique and rather social side including people’ s life. It was good opportunity for us to understand the different approach and exchange them each other.After the presentation, we had a dinner party with the critics and students the all critics gave some comments to us. They admired our workshop and students’ works. I think that all students were so happy after serious time. Some students did questions to the critics and got advices from them without hesitation. I think that students became tough and open mind through this workshop.